日田市埋蔵文化財調査報告書第108集

朝日の遺跡Ⅰ

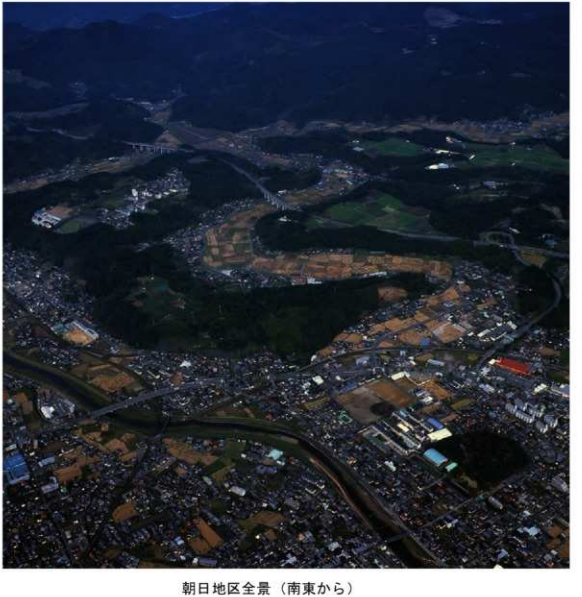
－県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）－

平田遺跡・尾部田遺跡２次の調査

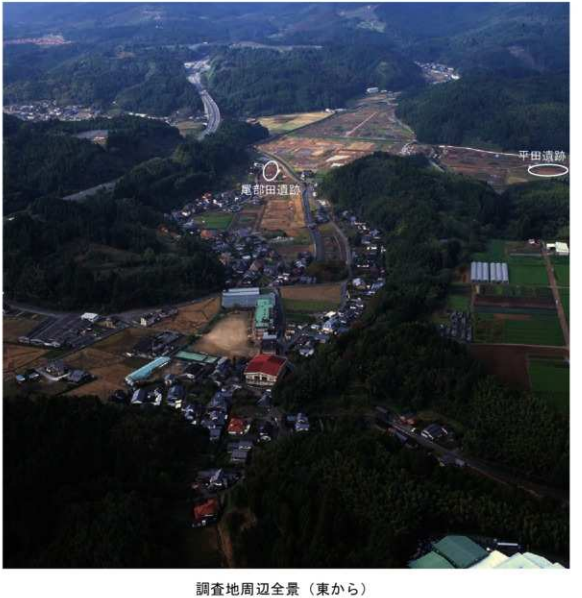
２０１３年

日田市教育委員会

朝日の遺跡Ⅰ　平田遺跡・尾部田遺跡２次　日田市埋蔵文化財調査報告書第108集　２０１３年　日田市教育委員会



朝日地区全景（南東から）



調査地周辺全景（東から）

序　文

この報告書は、当委員会が平成２３年度に県営経営体育成基盤整備事業朝日地区の工事実施に伴って、発掘調査を行った平田遺跡・尾部田遺跡の調査内容をまとめたものです。平田遺跡の調査では、古墳時代の竪穴建物跡や奈良時代の掘立柱建物跡が発見されました。なかでも奈良時代の掘立柱建物跡は、規則的に配置された倉庫や建物が発見され、当時の住宅の様子をうかがうことができる貴重な資料を得ることができました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や朝日地区の歴史解明、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査中に来訪いただきました、別府大学の下村智先生はじめ、ご協力を賜りました朝日地区圃場整備組合や地元の皆様方、すべての関係者の方々に、心から厚くお礼を申し上げます。

平成 25 年 3 月

日田市教育委員会

教育長　合原　多賀雄

例　言

1．本書は、日田市教育委員会が平成23年度に実施した平田遺跡・尾部田遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、平成23年度に県営経営体育成基盤備事業朝日地区朝日工区の工事実施に伴い、大分県西部振興局の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり、実施した。

3．調査にあたっては、朝日地区圃場整備組合、川原興業株式会社、株式会社谷組、市農業振興課にご協力を賜った。

4．発掘調査は若杉が担当した。

5．平田遺跡の発掘調査は、地形測量、メッシュ杭設置、平面遺構実測、個別遺構実測、土層実測、合成図作成及び空中写真撮影を調査補助業務として、株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託して実施した。

6．尾部田遺跡の発掘調査は、地形測量、平面遺構実測、個別遺構実測、土層実測、合成図作成を調査補助業務として株式会社九州文化財総合研究所に、空中写真撮影を九州航空株式会社に委託して実施した。

7．遺構写真撮影は、若杉が行った。

8．調査中は、現地にて下村智先生（別府大学教授）のご指導・ご助言を賜った。

9．平田遺跡の遺構製図は株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に、尾部田遺跡の遺構製図は株式会社九州文化財総合研究所に委託した。

10. 遺物実測・製図については、雅企画有限会社に委託し、その成果品を使用した。

11. 遺物写真撮影は株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託し、その成果品を使用した。

12. 挿図中の方位、文中の方位角は真北を示す。

13. 写真図版の遺物に付した番号は、実測図番号に対応する。

14. 出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。

15. 本書の執筆はⅡを上原、その他は若杉が行い、全体の編集は若杉が行った。

日田市の位置

本文目次

Ⅰ　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
（1）調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
（2）予備調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
（3）発掘作業の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
（4）整理等作業の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

Ⅱ　遺跡の位置と環境・・・　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

Ⅲ　平田遺跡の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
（1）調査の方法と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
（2）遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

Ⅳ　尾部田遺跡の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
（1）調査の方法と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
（2）遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

Ⅴ　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
（1）平田遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
（2）尾部田遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

挿図目次

第1図　工事実施区域と調査区位置図（1/10,000）……………… 1
第2図　平田遺跡調査区位置図（1/1,000）……………… 2
第3図　尾部田遺跡調査区位置図（1/1,000）……………… 3
第4図　周辺遺跡分布図（1/25,000）……………… 7
第5図　遺構配置図（1/500）……………… 8
第6図　1号竪穴建物跡実測図（1/60）……………… 9
第7図　1号竪穴建物跡カマド・屋内土坑実測図（1/30）……………… 10
第8図　1号竪穴建物跡出土遺物実測図（1/3）……………… 10
第9図　2・3号竪穴建物跡実測図（1/60）……………… 11
第10図　2号竪穴建物跡カマド実測図（1/30）……………… 11
第11図　2・3号竪穴建物跡出土遺物実測図（1/3）……………… 12
第12図　4号竪穴建物跡（1/60）及び出土遺物実測図（1/3）……………… 13
第13図　5号竪穴建物跡実測図（1/60）……………… 13
第14図　掘立柱建物群配置図（1/250）……………… 14
第15図　1号掘立柱建物跡実測図（1/60）……………… 15
第16図　2号掘立柱建物跡実測図（1/60）……………… 16
第17図　1・2号掘立柱建物跡出土遺物実測図（1/3）……………… 17
第18図　3号掘立柱建物跡実測図（1/60）……………… 17
第19図　4号掘立柱建物跡実測図（1/60）/500）……………… 18
第20図　5号掘立柱建物跡実測図（1/60）（1/60）……………… 18
第21図　溝状遺構実測図（1/250・土層 1/50）及び出土遺物実測図（1/3）……………… 20
第22図　土坑実測図（1/30）……………… 21
第23図　土坑出土遺物実測図（1/3）……………… 21
第24図　その他の出土遺物実測図（1/1・1/3）……………… 23
第25図　遺構配置図（1/500）……………… 24
第26図　1トレンチ西壁土層実測図（1/50）……………… 25
第27図　溝状遺構実測図（1/100・土層 1/50）……………… 25
第28図　土坑実測図（1/30）……………… 25
第29図　出土遺物実測図（1/1・1/2・1/3）……………… 27

本文写真目次

写真１　発掘作業風景 …… 4
写真２　溝状遺構１トレンチ土層堆積状況 …… １９
写真３　溝状遺構３トレンチ土層堆積状況 …… １９
写真４　１号溝状遺構土層堆積状況 …… ２５

表 目 次

第１表　県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う調査一覧 …… 4
第２表　出土土器観察表（１）…… ２９
第３表　出土土器観察表（２）…… ３０

写真図版目次

巻頭写真図版１　朝日地区全景（南東から）
巻頭写真図版２　調査地周辺全景（東から）

平田遺跡

写真図版１　平田遺跡調査区全体写真（南から）
写真図版２　上　１号竪穴建物跡発掘状況（南西から）
中　１号竪穴建物跡屋内土坑土層堆積状況
下　１号竪穴建物跡屋内土坑発掘状況（南東から）
写真図版３　上　１号竪穴建物跡カマド発掘状況（西から）
中　１号竪穴建物跡遺物出土状況
下　２・３号竪穴建物跡発掘状況（南西から）
写真図版４　上　２号竪穴建物跡カマド発掘状況（北西から）
中　４号竪穴建物跡発掘状況（南東から）
下　５号竪穴建物跡発掘状況（北東から）
写真図版５　上　１号掘立柱建物跡発掘状況（北東から）
中　１号掘立柱建物跡柱穴（Ｐ６）遺物出土状況
下　２号掘立柱建物跡発掘状況（南東から）
写真図版６　上　２号掘立柱建物跡柱穴（Ｐ５）柱木出土状況
中　２号掘立柱建物跡柱穴（Ｐ５）柱木出土状況
下左　２号掘立柱建物跡柱穴（Ｐ７）柱木出土状況
下右　２号掘立柱建物跡柱穴（Ｐ10）柱木出土状況
写真図版７　上左　２号掘立柱建物跡柱穴（Ｐ13）柱木出土状況
上右　２号掘立柱建物跡柱穴（Ｐ13）柱木出土状況
下左　２号掘立柱建物跡柱穴（Ｐ14）柱木出土状況
下右　２号掘立柱建物跡柱穴（Ｐ14）柱木出土状況
写真図版８　上　２号掘立柱建物跡柱穴（Ｐ11）柱木出土状況
中　３号掘立柱建物跡発掘状況（北西から）
下　４号掘立柱建物跡発掘状況（南東から）
写真図版９　上　５号掘立柱建物跡発掘状況（東から）
下　溝状遺構検出状況（南から）
写真図版 10　上左　１号土坑発掘状況（南から）
上右　２号土坑発掘状況（南から）
下左　３号土坑発掘状況（南東から）
下右　４号土坑発掘状況（南東から）

尾部田遺跡

写真図版 11　上　尾部田遺跡調査区全景（南東から）
下左　１号溝状遺構発掘状況（東から）
下右　２号溝状遺構発掘状況（南東から）
写真図版 12　上左　１号土坑発掘状況（南西から）
上右　３号土坑発掘状況（南から）
中　２号土坑土層堆積状況
下　２号土坑発掘状況（北東から）

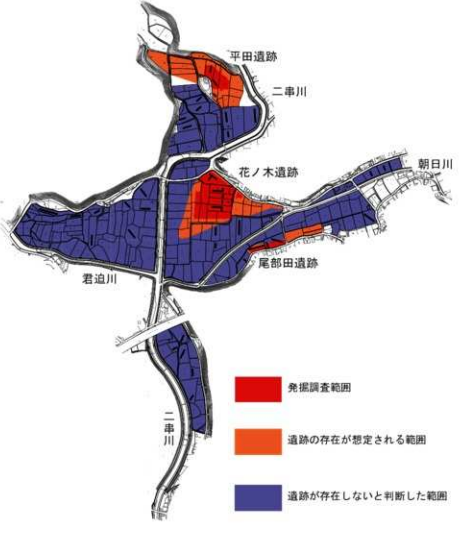
写真図版 13 ～ 17　平田遺跡・尾部田遺跡出土遺物

Ⅰ　調査の経過

（１）調査に至る経緯

県営経営体育成基盤整備事業（担い手育成型）朝日地区は、日田盆地北西部の朝日川流域とその周辺一帯の約43ha（当初計画の工事面積）を対象として水田の区画整理を実施し、農地の集積を図り、ある程度以上の規模の農業者や集落営農組織等の担い手を育成する目的で平成21～26年度（平成24年度時点では事業期間は平成27年度）の予定で事業が計画された。

この事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについては、平成21年度採択に向け、大分県（事業主体：大分県西部振興局、以下、県振興局）が国へ事業申請を実施する前の平成20年6月に最初の協議がもたれた。まず、事業予定地の埋蔵文化財については、大部分が周知の埋蔵文化財包蔵地に該当しなかったものの、国指定史跡小迫辻原遺跡や県指定史跡の吹上遺跡・朝日天神山古墳群を見上げる沖積地に位置しており、十分に遺跡の存在が予想され



第１図　工事実施区域と調査区位置図（1/10,000）

た。そこで、工事年度に合わせてその都度、予備調査を実施することにした。

その後、平成21年度に大分県文化課が実施した平成22年度農林業関係事業実施予定地の分布調査において、最初の工事実施区域である朝日工区が予備調査の必要な範囲と判定された。さらに翌年度以降、順次、小迫工区、君迫工区とも予備調査が必要と判断されている。

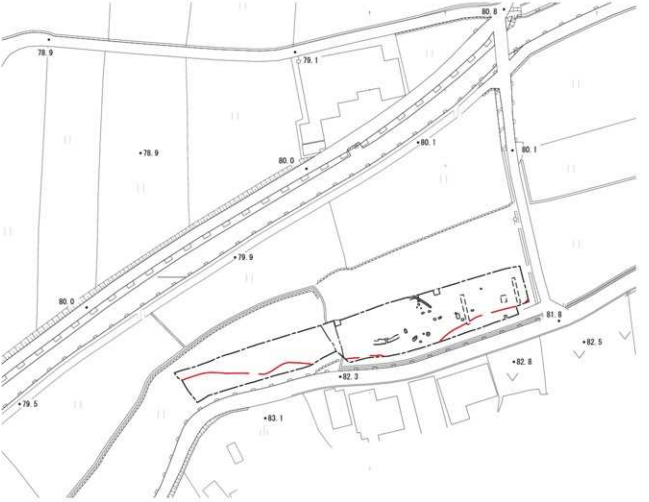
なお、調査関係者は次のとおりである。（職名は当時のまま）

平成 23（2011）年度／発掘調査、整理等作業

調査責任者　合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）

調 査 統 括　財津隆之（日田市教育庁文化財保護課課長）

第２図　平田遺跡調査区位置図（1/1,000）



第３図　尾部田遺跡調査区位置図（1/1,000）

調 査 事 務　井上和泉　若杉竜太（以上、日田市教育庁文化財保護主査）

調 査 担 当　若杉竜太（日田市教育庁文化財保護課主査）

発掘作業員（平田遺跡）

石松高子　伊藤大智　伊藤武士　井上能　江藤惠子　小ヶ内カオル　加藤寿子

加藤祐一　河津定雄　河津博文　河津良成　黒瀬順二　合原建國美　小暮裕次

五反田静子　財津真弓　坂田次光　佐々木誠一郎　高村三郎　竹本和則　谷口なつ子

津村小夜子　楢原理恵　長谷部修一　松尾久美子　宮本栄二　森山敬一郎　森山順

森山直郁　矢幡誠二　弥吉直美　横尾辰巳　米村公宏

（尾部田遺跡）

秋吉新六　石井百合子　石谷アサカ　伊藤武士　江藤キミ子　江藤惠子　河津モリ

北澤幾子　黒瀬順二　小暮裕次　竹本和則　谷口なつ子　谷口芳枝　長谷部修一

原田強　宮木博幸　宮崎幸也

整理作業員　伊藤一美　安元百合

平成24(2012)年度／整理等作業、報告書作成・印刷

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）
調 査 統 括　財津俊一（日田市教育庁文化財保護課課長）
調 査 事 務　井上和泉　若杉竜太（以上、日田市教育庁文化財保護課主査）
報告書担当　若杉竜太（日田市教育庁文化財保護課主査）　上原翔平（同主事）
整理作業員　石松裕美　伊藤一美　黒木千鶴子　武石和美　安元百合

（2）予備調査

朝日工区の予備調査は稲刈り後の平成 22 年 11 月 15 日から 12 月 17 日まで実施した。工事対象面積 177,044 ㎡のうち、基本として工事により削平を受ける水田を対象にトレンチを設定した。最終的にはトレンチが 40 箇所、面積は約 850 ㎡となった。これらのうち、9 箇所のトレンチから遺構が確認され、何れも工事による削平が及ぶか、もしくは九州地区埋蔵文化財発掘調査基準に示された 30cm の保護層が確保できないことが判明した。これら 9 箇所のトレンチは朝日川左岸及びむ右岸、二串川右岸の 3 箇所に分かれていたが、周知の埋蔵文化財包蔵地には該当していなかった。そこで、朝日川左岸に位置する部分は近接する尾部田遺跡の範囲を拡大し、また朝日川左岸及び二串川右岸の 2 箇所については字名を取り、花ノ木遺跡・平田遺跡として遺跡の新登録を行った。なお、この時点での調査対象面積は花ノ木遺跡 16,000 ㎡、平田遺跡 6,000 ㎡、尾部田遺跡 1,600 ㎡となっている。

そして平成 22 年 12 月 20 日付けでこの結果を県振興局へ報告するとともに、遺構面を保護できるような工法変更による盛土保存が一部でも可能かどうかの確認を行ったが、最終的には工法変更は不可能であったことから、全て調査対象となった。その後、平成 23 年 2 月 24 日付けで文化財保護法第 94 条の通知文を大分県教育委員会に提出、同年 3 月 3 日付けで発掘調査を実施する旨の通知があり、同年 3 月 7 日付けで県振興局あてに伝達を行った。

以上の経過を経て、翌平成 23 年 6 月 15 日付けで花ノ木遺跡・平田遺跡・尾部田遺跡の遺跡毎で県振興局と委託契約を締結し、調査に着手した。また、本事業における発掘調査等の契約等の内容、平成 24 年度 3 月時点において予備調査および発掘調査を実施及び予定しているのは、下の表のとおりである。

第 1 表　県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う調査一覧

予備調査実施年度	工区	開発面積（㎡）	予備調査面積（㎡）	時代	処置	発掘調査等の委託契約					備考
						遺跡名	内容	履行期間	発掘調査期間	調査面積（㎡）	
平成 22 年度	朝日 1・2 工区	177,044	850	弥生～中世	一部、発掘調査	花ノ木	発掘	H23.6.15 ～ H24.3.19	H23.7.4 ～ 12.5	10,723	
						平田	発掘 整理	H2.36.15 ～ H24.2.29	H23.10.3 ～ 11.24	2,749	
						尾部田	発掘 整理	H23.6.15 ～ H24.1.23	H23.10.19 ～ 11.16	1,055	
平成 23 年度	小迫 1・2 工区	213,303	955	弥生～古代	一部、発掘調査	鍛冶屋廻り	発掘 整理	H24.6.15 ～ H25.1.15	H24.7.23 ～ 8.27	550	
						本村	発掘 整理	H24.8.1 ～ H25.2.28	H24.8.22 ～ 11.21	2,498	
						花ノ木 平田 尾部田	整理 報告書	H24.6.15 ～ H25.3.26	－ － －	－ － －	契約一本化
平成 24 年度	君迫工区	予備調査予定									

（3）発掘作業の経過

平田遺跡・尾部田遺跡の発掘調査について、経過を以下に述べる。

平田遺跡

7月7日～

10月8日　耕作土除去（この間、断続的に行う、諸事情により本格的な着手ができず）

10月12日　作業員による遺構検出開始

10月17日　基準点測量

10月18日　遺構略図実測開始

この間、遺構検出面の標高から遺構面の保護が可能な部分や遺構が存在しない部分があることが判明したことから、6,000㎡としていた調査対象面積は減少し、最終的な調査面積は2,749㎡となっている。（詳細はⅢ（1）参照。）

10月24日　遺構掘り下げ開始

10月27日　個別遺構および平面図実測開始

11月11日　大分県教育庁文化課・後藤副主幹来訪

11月14日　別府大学・下村教授来訪

11月15日　空中写真撮影

11月17日　遺構掘り下げ終了

11月21日　遺構実測終了

11月22日　器材整理・撤収

11月23日　盛土保存部分、埋め戻し開始

11月24日　埋め戻し及び調査終了

尾部田遺跡

7月13日　耕作土除去開始

7月14日　耕作土除去終了

この間、諸事情により本格的着手できず

10月19日　作業員による遺構検出開始

10月26日　遺構掘り下げ開始

11月　4日　空中写真撮影

11月　9日　遺構掘り下げ終了、遺構実測開始

11月10日　遺構実測終了

11月14日　器材整理

11月15日　器材撤収、調査終了

写真1　発掘作業風景

（4）整理等作業の経過

整理等作業は、発掘調査が終了後の12月より実施した。まず、出土量が少なかった尾部田遺跡の遺物について、平成23年12月1日より開始、平成24年1月18日に終了した。

また、平田遺跡の出土遺物については、平成24年2月2日から2月29日まで行い、水洗、注記及び接合の一部まで行い、平成23年度の作業は終了した。なお、この中で器面の剥落などで脆くなっている土器については、バインダー処理を施している。翌平成24年度は7月2日より作業を開始、花ノ木遺跡の整理作業と平行しながら接合を実施、一部については、石膏により補強を行い、7月11日に終了した。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

今回調査をおこなった平田遺跡及び尾部田遺跡は日田市大字小迫字平田および字下山に所在し、日田盆地の北部、宮原台地の西側を流れる二串川右岸、南側を流れる朝日川左岸の狭長な沖積地に位置している。この２つの河川が尾部田遺跡の西側で合流し、三隈川の支流で花月川に注ぎ込む。

遺跡の所在する大字小迫は、日田市の町名区分上では朝日地区に含まれており、朝日地区は大字小迫をはじめ、大字二串、大字山田の３地域で構成されている[1]。この朝日地区は近世においては、豊後国日田郡曰理（わたり）郷の一部であり、現在の渡里という地名は古代日田の五郷の一つ「曰理」として『和名類聚抄』に記されており古くから知られる地域であったといえる[2]。

以下、朝日地区に所在する主な遺跡について時代ごとに概観する。

旧石器時代では、二串西原遺跡で旧石器時代後期～終末期に属するナイフ形石器、台形様石器、細石刃などが10数点確認されている[3]。

縄文時代では、尾部田遺跡で縄文後期の竪穴建物跡が確認され、縄文時代の集落立地を考える上で貴重な例となっている[4]。

弥生時代では、朝日宮ノ原遺跡で前期～後期の集落と墳墓群[5]、小迫辻原遺跡では前期後半～中期後半の集落と墳墓[6]、吹上遺跡では前期～後期の集落と墳墓が確認される[7]など、周辺台地上に規模の大きな遺跡が所在する。なかでも吹上遺跡６次調査では銅剣や銅戈・貝輪など豪華な副葬品を有する甕棺墓などで構成される墳墓群が確認され、当該期の日田を代表する集落とその中心的な存在を窺い知る事ができる。

吹上原台地北側の辻原台地上に所在する小迫辻原遺跡では、弥生終末期～古墳時代初頭にかけて環濠集落と方形環濠が溝によって区画されながら変遷する様相が確認されており、日田盆地の盟主的存在の豪族居館と考えられると共に、国家形成期の社会状況を解明する遺跡として注目されている[8]。そのほか、本村遺跡や尾部田遺跡の調査では、弥生後期～古墳時代初頭頃の集落が確認されており[9]、小迫辻原遺跡と同時期の台地縁辺部の様相が明らかになりつつある。

古墳時代では、４世紀後半～５世紀前半の粘土郭を主体部とした円墳の小迫古墳[10]、５世紀～７世紀中頃の61基の横穴墓が確認された小迫横穴墓群などが知られているが[11]、なかでも６世紀前半には、この時期では県下最大級の前方後円墳である朝日天神山古墳２号墳が築かれる。周溝からは埴輪の代わりと考えられる大型平底壺が出土するなど特徴的な様相を示し、続く６世紀後半に築かれた１号墳からは、馬具類、太刀や三輪玉などが出土しており、大和政権との関係を想起させる[11]。

古代では、小迫辻原遺跡でＬ字に整然と並ぶ大型掘立柱建物群が検出され、そこから郡司最高位にあたる「大領」と書かれた土器が出土しており、郡司の居宅と想定されている。そのほか、本村遺跡などで８世紀代の集落が見つかっており、台地縁辺部に当該期の集落が広がっていたものと考えられる[12]。

中世では、小迫辻原遺跡で15世紀の環濠屋敷が６ヶ所確認され、小札や「乙王丸」銘の青磁碗が出土していることから、武家屋敷が台地上に広がっていたと考えられる[13]。また、朝日宮ノ原遺跡Ａ区４号墓で青磁碗、湖州鏡、合子や数珠玉などが一括で副葬された12世紀の土坑墓が発見されるなど[14]、日田地域の中世社会を知る貴重な成果が得られている。

近世においては、鍛冶屋廻り遺跡で道路や水路などが発見されている[15]。

このように、朝日地区は日田市の歴史だけでなく、日本の歴史を知る上でも重要な遺跡が数多く所在する地区であるといえる。

註

(1)日田市町名に関する告示　平成13年3月13日　告示第19号

(2)日田市「日田市史」　1990

(3)「九州横断自動車道路建設に伴う発掘調査概報」　大分県教育委員会　1984

(4)行時志郎　「尾部田遺跡」　日田市埋蔵文化財調査報告書34集　日田市教育委員会2001

(5)土居和幸編「朝日宮ノ原遺跡・谷ノ久保遺跡」　日田市文化財調査報告第104集　日田市教育委員会2012

(6)田中裕介・土居和幸・清水宗昭　「小迫辻原遺跡１」　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10　大分県教育委員会　1999

(7)渡邉隆行 編　「吹上Ⅳ－吹上遺跡６次調査の記録－」　日田市埋蔵文化財調査報告書第70集　日田市教育委員会 2000

(8)註６に同じ

(9)若杉竜太　「本村遺跡3次」　日田市埋蔵文化財調査報告書第51集　日田市教育委員会　2004

(10)小柳和弘編「小迫墳墓群」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(3)　大分県教育委員会　1995

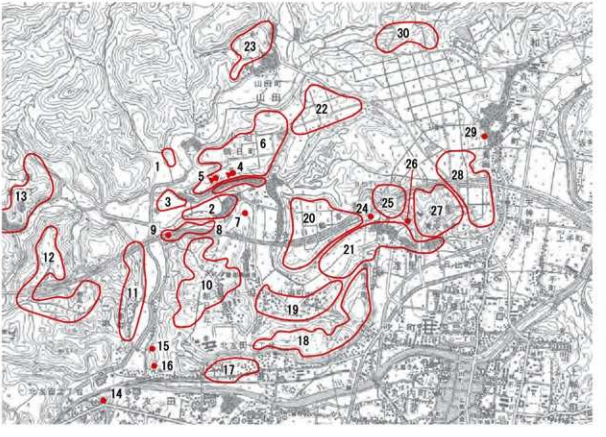
(11)若杉竜太 編　「朝日天神山古墳」　日田市埋蔵文化財調査報告書第60集　日田市教育委員会　2005

(12)註９に同じ

(13)註６に同じ

(14)註５に同じ

(15)若杉竜太　「鍛冶屋廻り遺跡」　日田市埋蔵文化財調査報告書　第92集　2010



1. 平田遺跡 2. 尾部田遺跡 3. 花ノ木遺跡 4. 朝日天神山１号墳 5. 朝日天神山２号墳 6. 朝日宮ノ原遺跡 7. 城ノ越古墳
8. 小迫横穴墓群 9. 小迫古墳 10. 朝日ヶ丘遺跡 11. 二串西原遺跡 12. 山の神（二串）遺跡 13. 君迫遺跡 14. 三郎丸古墳
15. 鳥越古墳 16. 片山石棺 17. 今泉遺跡 18. 吹上遺跡 19. 鍛冶屋廻り遺跡 20. 小迫辻原遺跡 21. 本村遺跡 22. 山田原遺跡
23. 山ノ口遺跡 24. 草場原古墳 25. 草場第２遺跡 26. 草場古墳 27. 草場第１遺跡 28. 後迫遺跡 29. 用松中村古墳 30. 谷ノ久保遺跡

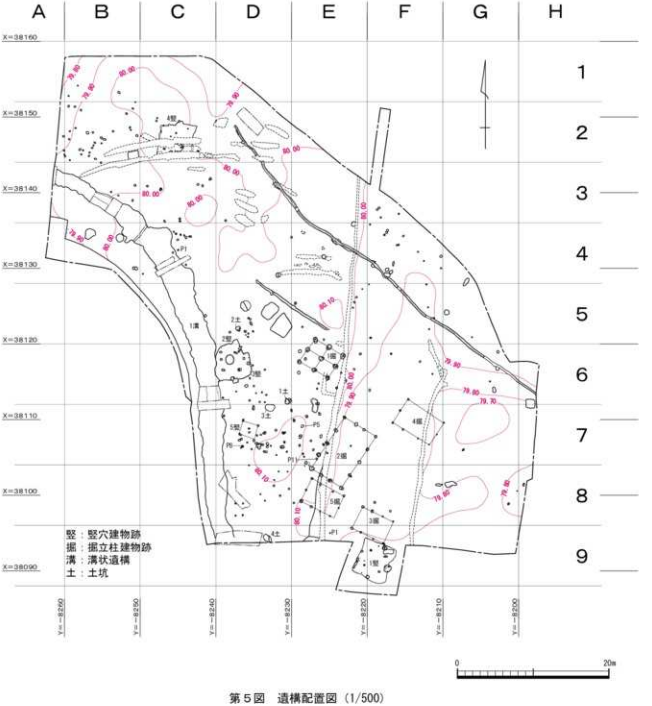
第４図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

Ⅲ　平田遺跡の調査

(1)調査の方法と概要（第５図）

調査は朝日工区のうち、最も北側に位置する箇所を対象とし、表土剥ぎは調査対象地の北西側より開始した。遺構検出面は礫混じりの黄褐色粘質土で、前年の予備調査を行った対象地南側のトレンチ付近では水田基盤土から約５～15㎝下で確認されていたが、北側はやや深く、約20～25㎝であった。

遺構は調査区の中央付近から南側を中心に竪穴建物跡や掘立柱建物跡、土坑などが確認されたほか、溝状遺構が北西側から南側にかけて、ピットは北西側・北東側及び南側において、多く検出された。遺構の埋土は灰褐色・黒褐色を呈したものが中心で、ほかに淡褐色・淡灰褐色のものが少々見られた。



第５図　遺構配置図（1/500）

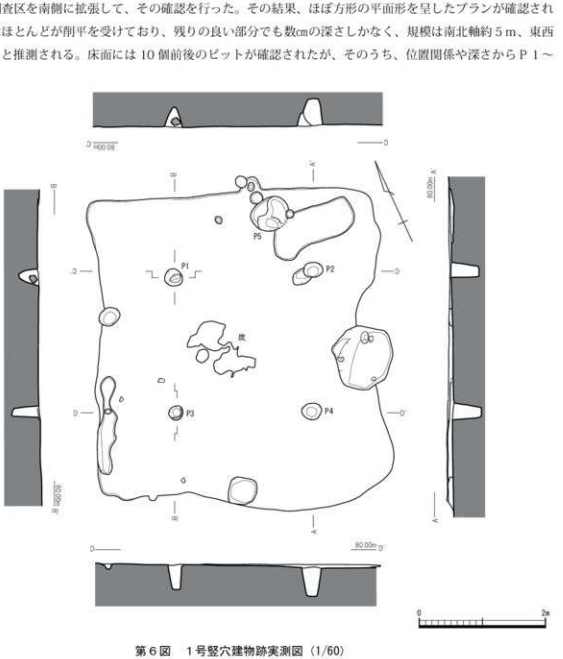
なお、この間、遺構検出面の標高から遺構面の保護が可能な部分が存在することが判明し、一部の遺構については検出のみ及びトレンチによる確認にとどめ、全掘を行わないことにした。それとともに、北側についてはトレンチによる確認のみとしたことから、当初6,000㎡としていた調査対象面積は減少し、最終的には2,749㎡となっている。なお、調査区内を西から東へA・B・C・・・、北から南へ1・2・・・・とグリッドを設定し、ピット番号や遺物の取り上げに利用している。

（2）遺構と遺物

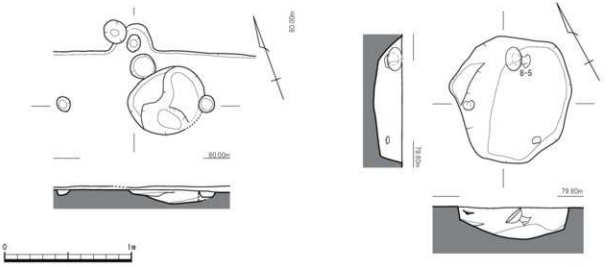
1．竪穴建物跡

1号竪穴建物跡（第6・7図　図版2・3・13）

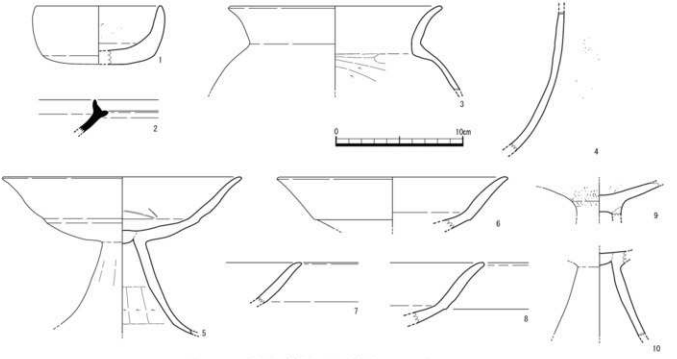
この竪穴建物跡は調査区南側、E 9グリッド、F 9グリッドで確認され、3号掘立柱建物跡に切られる。当初、検出した段階では北西側の角がわずかに検出されていたのみであったが、竪穴建物跡の可能性が高いと判断したことから調査区を南側に拡張して、その確認を行った。その結果、ほぼ方形の平面形を呈したプランが確認された。上面はほとんどが削平を受けており、残りの良い部分でも数㎝の深さしかなく、規模は南北軸約5m、東西軸約4.8mと推測される。床面には10個前後のピットが確認されたが、そのうち、位置関係や深さからP 1～



第6図　1号竪穴建物跡実測図（1/60）



第７図　１号竪穴建物跡カマド・屋内土坑実測図（1/30）

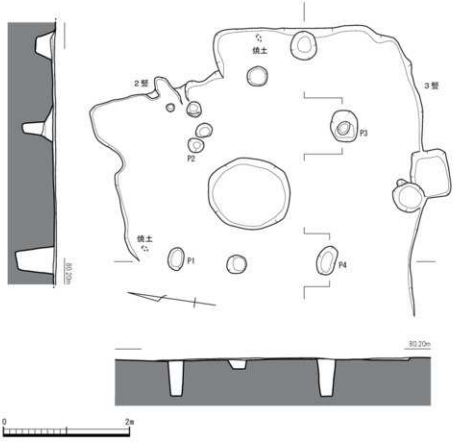


第８図　１号竪穴建物跡出土遺物実測図（1/3）

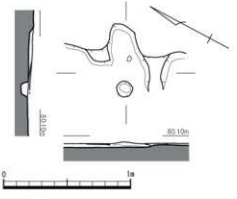
Ｐ４が主柱穴と判断できた。これらの柱穴の深さは床面より、30～50㎝を測る。また、東壁側の中央付近には、円形を呈した土坑が確認された。当初は独立した土坑（旧５号土坑）として考えていたが、壁の推定ライン上にくる位置関係や建物と同時期の遺物が出土したことから、この建物の屋内土坑と判断した。この屋内土坑の規模は北東 - 南西軸が約 0.9 m、北西 - 南東軸が約１m、検出面からの深さは約 25 ㎝を測る。

床面中央には炭の広がりが検出された。明確な落ち込みは確認できなかったものの、炉跡になる可能性がある。また、建物の北壁中央付近には煙道と思われる突出部や袖石の抜取り痕とみられるピットが確認された。そのためカマドを想定したものの、炭や焼土が確認されず、また袖間の幅も約 100 ㎝とカマドにやや広すぎることや屋内土坑との位置関係から明確にカマドと断定するには至らなかったため、ここではその可能性があるとだけしておく。このほか、南西側の一部には壁際溝とみられる掘り込みが確認できた。

遺物は土師器坏・甕・甑・高坏、須恵器坏身などが出土している。



第９図　２・３号竪穴建物跡実測図（1/60）



第 10 図　２号竪穴建物跡カマド実測図（1/30）

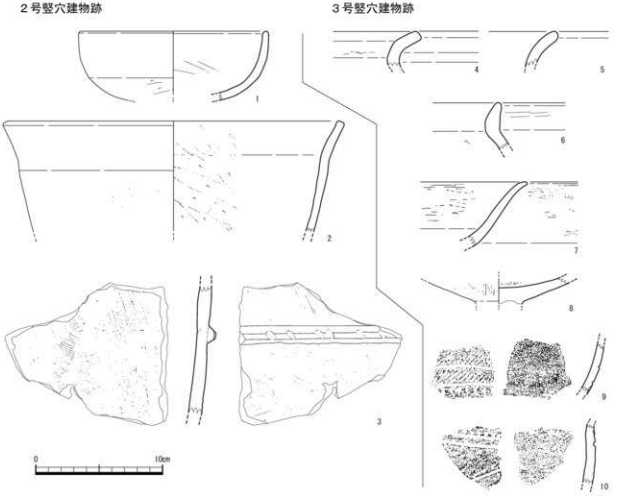
第８図１は土師器坏である。器壁を厚く仕上げ、内面にススが付着する。２は須恵器坏身である。他の遺物に比べ、新しい時期のもので、流れ込みによるものか。３は土師器甕である。口縁部は長く、やや外反する。４は土師器甑である。胴部下半から底部にかけての破片とみられるが、把手や蒸気孔の痕跡は確認できなかった。５～10は土師器高坏である。５は脚端部を除いて残存している。坏部下半はやや丸味を帯びるが、中位付近の稜を境に端部に向かって外に開く。脚柱部と裾部の境は明瞭でない。坏部内面や脚部内面にはケズリが施される。６・８は端部がやや外に開く。９は外面にハケ目が明瞭に残る。

２・３号竪穴建物跡（第９図　図版３・４・13・14）

この竪穴建物跡は調査区中央付近、Ｄ６グリッドで確認され２軒が切り合う。１号竪穴建物跡と同様に削平が著しかったため、当初は２軒の切り合いがあるとは判断できずに掘り下げを行った。

まず、２号竪穴建物跡は３号竪穴建物跡の北側に位置し、東壁と南壁の一部が残り、平面形は方形を呈すると考えられる。規模は東壁約 2.1 m、北側約 2.5 mを測り、検出面から床面までの深さは数cmしかない。また、主柱穴と判断できるピットは確認できなかった。

また、東壁にはカマドの煙道と思われる張り出しとその左右には袖とみられる高まりが確認された。中央付近に支脚の抜取り痕とみられるピットがあったものの、焼土や袖石の抜き取り痕が検出されなかった。甑が出土し



第 11 図　２・３号竪穴建物跡出土遺物実測図（1/3）

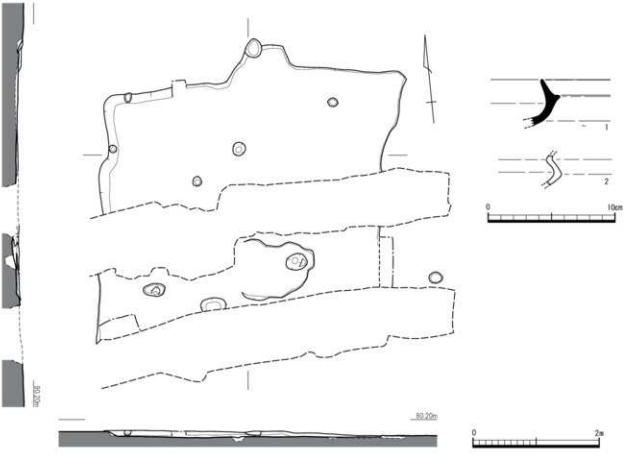
たことから、カマドの可能性があるとだけしておく。仮にカマドとした場合、規模は右袖の長さが約 25 ㎝、左袖が約 15 ㎝残り、支脚の抜取り痕から煙道の先端までは約 50 ㎝を測る。

３号竪穴建物跡は東壁と南壁の一部しか残ってなく、平面形は方形を呈するものと思われる。また、壁は２号竪穴建物跡と同様、ほとんどが削平されており、床面まで数㎝しかない。この床面にはピットや土坑が 10 個ほど確認されたが、その中で位置関係や深さからＰ１からＰ４が主柱穴になると判断した。なお、中央にある土坑については、この建物に伴うかどうかは判断できなかった。この建物の規模は南壁からＰ１までが 3.6 m東壁からＰ４までの距離が約 3.5 mとなる。また、床面からの深さは４本の主柱穴が 50 ～ 60 ㎝、屋内土坑が約 10 ㎝を測る。

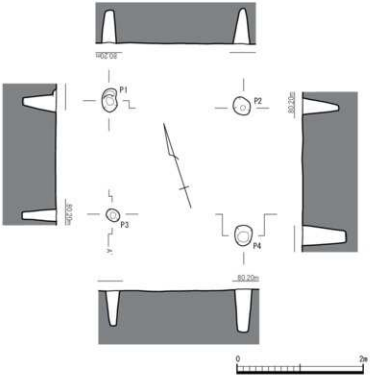
遺物は２号から土師器坏・甑、弥生土器壺（１～３）、３号から土師器甕・高坏、縄文土器鉢（４～10）が出土しているが、前述のとおり切り合いを判断できないまま掘り下げたため、双方の建物跡の遺物が混在していることを断っておく。

第 11 図１は土師器坏である。体部を丸く仕上げる。２は土師器甑である。口縁は端部よりやや下部で外側へ屈曲させている。３は弥生土器壺である。断面台形の突帯を貼り付けており、刻み目を施している。

４～６は土師器甕である。６は口縁を直立させる。７・８は土師器高坏の坏部である。７は端部が外側へ向けて仕上げている。８は脚部との接合痕が明瞭に残る。９・10 は縄文土器鉢である。９は外面に沈線・刺突文刻み目が施される。10 は外面に沈線・列点文、内面には条痕が施される。



第 12 図　4 号竪穴建物跡実測図（1/60）及び出土遺物実測図（1/3）



第 13 図　5 号竪穴建物跡実測図（1/60）

4 号竪穴建物跡

（第 12 図　図版 4・14）

この竪穴建物跡は調査区北側、C 2 グリッドで確認された。南側は攪乱を受けているが、平面形は方形を呈するものと考えられる。規模は東西軸が約 4.3 m、南北軸が約 4.2 m＋α を測り、検出面から床面までの深さは約 10 ㎝を測る。床面には数個のピットが確認されたが、主柱穴と判断できるものがなかった。また、建物跡の北側には方形の突出部がみられ、カマドがあったものと考えられたが、火床面や袖石などの抜取り痕、また焼土や炭も確認されず、カマドと判断するには至らなかった。

遺物は縄文土器浅鉢や須恵器坏身が出土している。

第 12 図 1 は須恵器坏身である。受け部は短くつまみ出し、端部は丸く仕上げる。

５号竪穴建物跡（第 13 図　図版４）

この竪穴建物跡は調査区南側、Ｄ７グリッドで確認された。壁は全て削平を受けており、平面形や規模は不明であるが、Ｐ１からＰ４のピットの位置関係や深さから、主柱穴と判断した。また、主柱穴間の長さは約 1.8 ～ 2.1 ｍを測る。そのほか、炉跡を示すような焼土や炭、屋内土坑や壁際溝などは確認されなかったことから、床面自体も削平されているといえる。なお、主柱穴の検出面からの深さは 55 ～ 60 ㎝を測る。

遺物は出土しなかった。

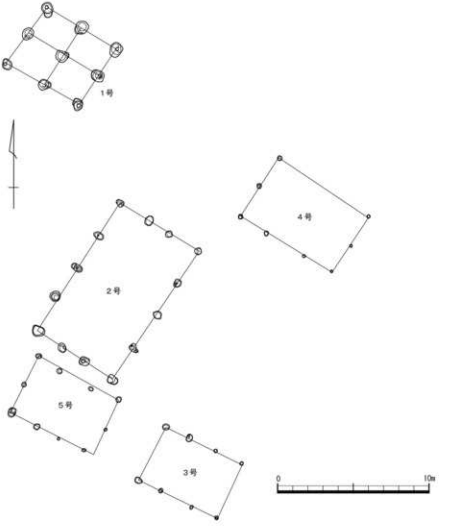
２．掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は調査区中央付近から南側にかけた、Ｅ６～９・Ｆ７～９グリッドで５棟が確認された。これらの建物は北東 - 南西方向及びこれに直交する方向で、主軸がほぼ揃っており、規則的に配置された建物群であったことが想定される（第 14 図）。

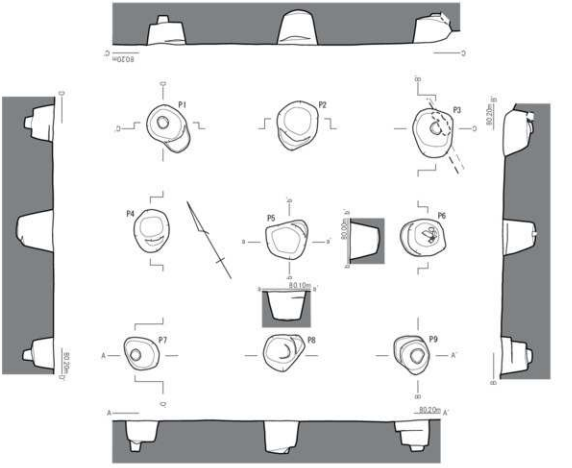
１号掘立柱建物跡（第 15 図　図版５・14）

この建物跡は建物群の北西側で確認された。主軸方向はＮ－ 60°－Ｗに取り、柱間が２間 × ２間の総柱建物である。規模は柱穴間の心々距離で桁行約 4.4 ｍ、梁行約 3.7 ｍ、側柱の深さは約 45 ～ 55 ㎝、屋内柱の深さは約 45 ㎝を測る。

また、Ｐ１、３、７～９で柱痕跡が確認でき、Ｐ１、３、６、７より須恵器坏が出土した。



第 14 図　掘立柱建物群配置図（1/250）



第 15 図　１号掘立柱建物跡実測図（1/60）

第 17 図１・２は土師器坏である。１は口縁端部をやや内湾させる。２は口縁端部を薄く仕上げる。３・４は土師器甕である。５は須恵器坏である。器壁は厚く仕上げられており、底部には高台の剥離痕がみられる。６は須恵器瓶の口縁部である。頸部下部にカキ目が施される。７は同じく瓶の胴部とみられ、外面にはカキ目が施される。６・７は同一個体か。８は須恵器甕である。外面は平行タタキの後、カキ目が施される。内面には同心円タタキが見られる。

２号掘立柱建物跡（第 16 図　図版５～８･14）

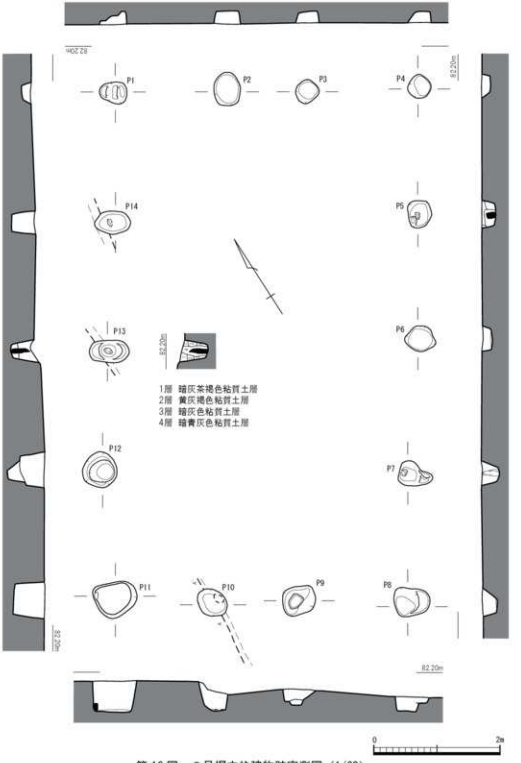
この建物跡は建物群の中央で確認された。主軸方向はＮ－33°－Ｅに取り、柱間が４間×３間の建物である。規模は柱穴間の心々距離で桁行約 8.2 m、梁行約 4.7 m と５棟の建物の中では最大である。また、Ｐ５、Ｐ 13 で柱木が残存していた。なお、柱穴の深さは約 15 ～ 60 ㎝である。

遺物は土師器甕がＰ１１から、須恵器坏蓋がＰ８から出土している。

第 17 図９は土師器甕である。頸部内面の屈曲はケズリにより、明瞭に仕上げられている。10 は須恵器蓋である。端部は丸く仕上げる。

３号掘立柱建物跡（第 18 図　図版８）

この建物跡は建物群の南端で確認され、１号竪穴建物跡を切る。主軸方向はＮ－ 64°－Ｗに取り、柱間が３



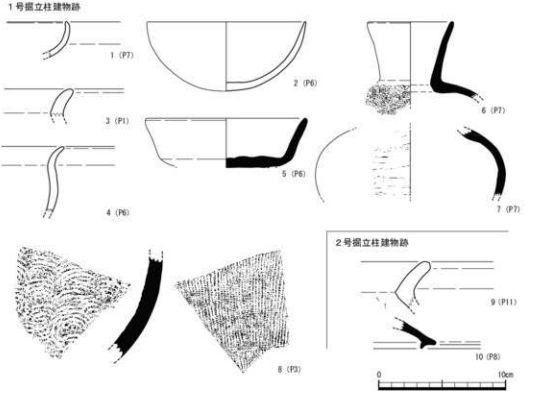
第 16 図　２号掘立柱建物跡実測図（1/60）

間×１間の建物である。規模は柱穴間の心々距離で桁行約 4.4 ～ 4.6 m、梁行約 3.1 mを測る。また、柱穴の深さは約 10 ～ 25 ㎝である。

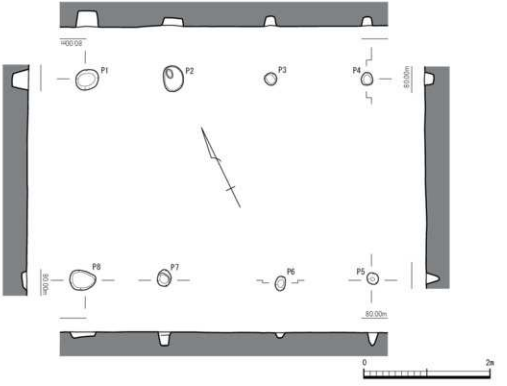
遺物は土師器甕などが出土しているが、図示可能なものはなかった。

４号掘立柱建物跡（第 19 図　図版８）

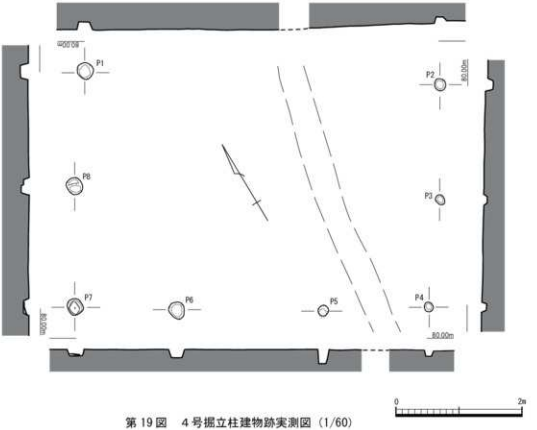
この建物跡は建物群の東側で確認された。主軸方向はＮ－ 58°－Ｗに取り、柱間は桁行が２間、梁行は南西



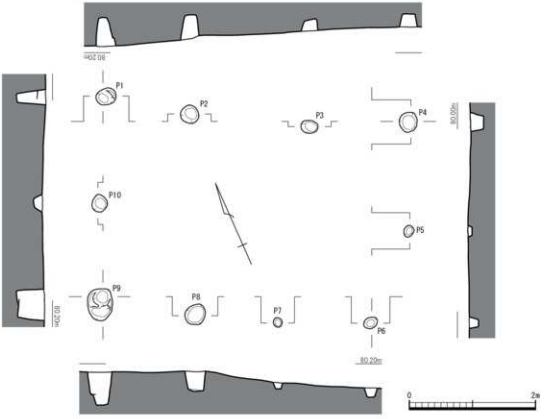
第 17 図　1・2号掘立柱建物跡出土遺物実測図（1/3）



第 18 図　3号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第 19 図　4 号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第 20 図　5 号掘立柱建物跡実測図（1/60）

側３間であるのに対し、北西側は間の柱穴が確認されず、隅の柱のみの１間と考えられる。規模は柱穴間の心々距離で桁行約 5.5 ～ 5.6 m、梁行約 3.5 ～ 3.8 mを測る。また、柱穴の深さは約５～ 20 ㎝である。

遺物は土師器甕などが出土しているが、図示可能なものはなかった。

５号掘立柱建物跡（第 20 図　図版９）

この建物跡は２号掘立柱建物跡のすぐ南側に隣接して確認された。主軸方向はN － 66°－Wに取り、柱間は桁行２間、梁行２間の建物である。規模は柱穴間の心々距離で桁行約 4.3 ～ 4.9 m、梁行約 3.2 ～ 3.3 mを測る。また、柱穴の深さは約５～ 55 ㎝である。

遺物は土師器甕などが出土しているが、図示可能なものはなかった。

３．溝状遺構（第 21 図　図版９･14）

この溝状遺構は、調査区の西側にある塚状の高まりに沿うように、調査区北西側から南側へ確認された。調査区内で確認された規模は長さ約 55 mで、両端ともに調査区外へ延びると考えられる。また、最大幅は約 3.5 m を測るが、肩の崩落も考えられることから、本来の幅は不明である。検出面からの深さは 35 ～ 60 ㎝で南側へ向かうにつれて深くなっており、標高は北側で約 79.8 m、南側で約 79.5 mであることから北から南へ向かって傾斜していることが確認できる。

なお、この遺構は工事によって遺構面が損なわれることがなかったことから、全面発掘は行わずに、一部の確認に留めている。

遺物は縄文土器の底部や須恵器器台が出土している。

第 21 図１は縄文土器の底部で、一部に黒斑が見られる。外面には指押さえがみられる。２は須恵器器台である。破片であるが、確認された突帯間に波状文が施される。

写真２　溝状遺構１トレンチ土層堆積状況

写真３　溝状遺構３トレンチ土層堆積状況

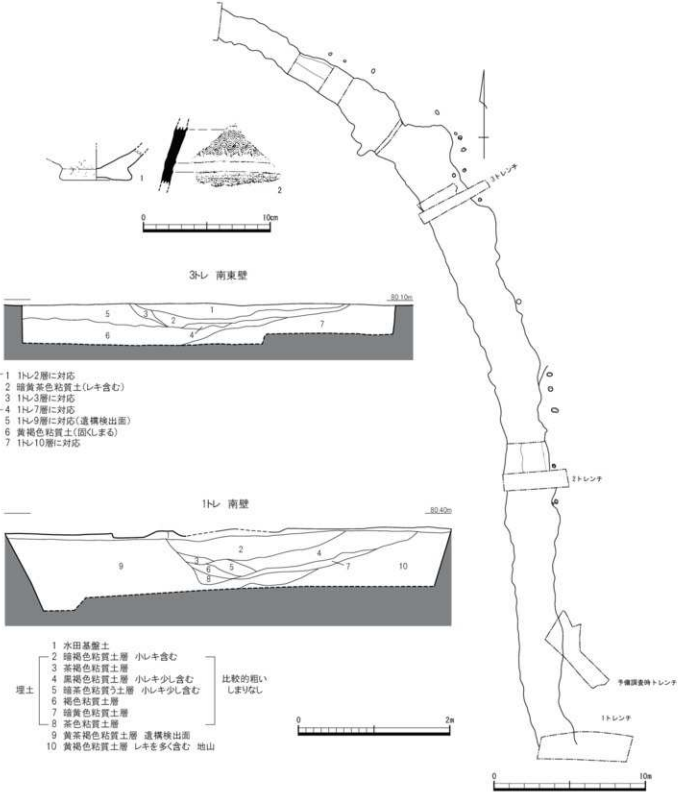
４．土坑

１号土坑（第 22・23 図　図版 10･14）

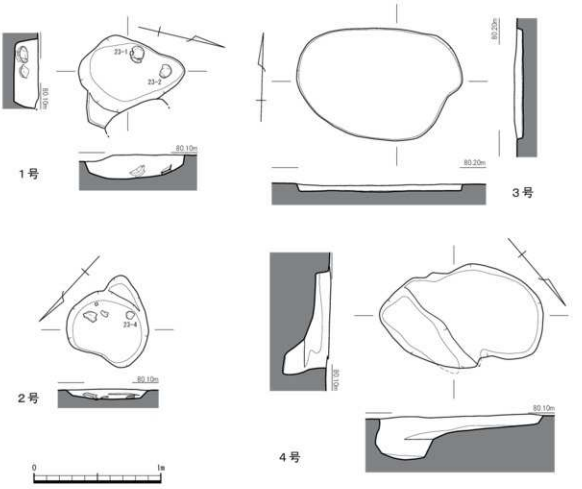
この土坑はＤ６グリッドの南西隅で確認された。東側の一部をピットに切られており、平面形は不定形である。床面は南北軸がやや舟底状に、東西軸はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。規模は南北軸約 0.85 m、検出面からの深さは最も深いところで約 20 ㎝を測る。

遺物は西壁側の床面付近から土師器椀が２点出土した。これらの椀のうち１点（第23図１）はほぼ完形で、２点とも正位置を保っていたことから、人為的に置かれたとも考えられる。

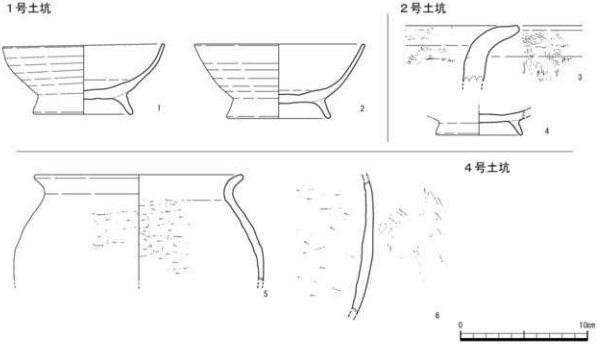
第 23 図１・２ともに土師器の高台付椀で、口縁端部を薄く仕上げ、高台は外に開き、端部を丸く仕上げる。また１・２とも底面に回転ラ切り痕が明瞭に残る。



第21図 溝状遺構実測図（1/250、土層1/50）及び出土遺物実測図（1/3）



第 22 図　土坑実測図（1/30）



第 23 図　土坑出土遺物実測図（1/3）

２号土坑（第 22･23 図　図版 10･15）

この土坑はＤ５グリッドの南側で確認された。平面形は本来楕円形に近い形状であったと思われるが、南側の肩が崩落し、不定形になっている。床面はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。規模は北東 - 南東軸で約 0.6 m、検出面からの深さは最も深いところで約 10 ㎝を測る。

遺物は床面付近より、土師器甕・坏が出土している。

第 23 図３は土師器甕である。口縁端部をつまみ出すように仕上げている。内面には接合痕が残る。４は土師器椀である。高台は１号土坑出土のものより、やや低く、直線的に外側に開き、端部を丸く仕上げる。

３号土坑（第 22 図　図版 10）

この土坑はＤ７グリッドの北端で確認された。平面形は楕円形に近い不定形を呈する。床面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は南北軸約 0.9 m、東西軸約 1.3 m、検出面からの深さは最も深いところで約５㎝しかなかった。

遺物は出土しなかった。

４号土坑（第 22 図　図版 10）

この土坑はＤ９グリッド、調査区の南端で確認された。平面形はやや歪な楕円形を呈する。床面は２段になっており、上段は北西から南東に向かって緩やかに傾斜、下段はやや円形を呈する。規模は北西 - 南東軸約 2.6 m、北東 - 南西軸が約 1.1 m、検出面からの深さは最も深いところで１段目が約 15 ㎝、２段目が約 35 ㎝を測る。

遺構の性格については詳しい検討は行えていないが、形状から横口式土坑墓の可能性も指摘しておきたい。

遺物は土師器甕が出土している。

第 23 図５・６は土師器甕である。５は短い口縁部を外反させ、端部を丸く仕上げている。外面・内面ともにケズリが施され、内面には接合痕が見られる６は５に比べ、長い胴部と思われ、外面にはハケ目、内面にはケズリが施される。

５．その他の遺物（第 24 図　図版 15･16）

ここでは、ピットや遺構に伴って出土していない遺物や検出時に出土した遺物などについて述べる。

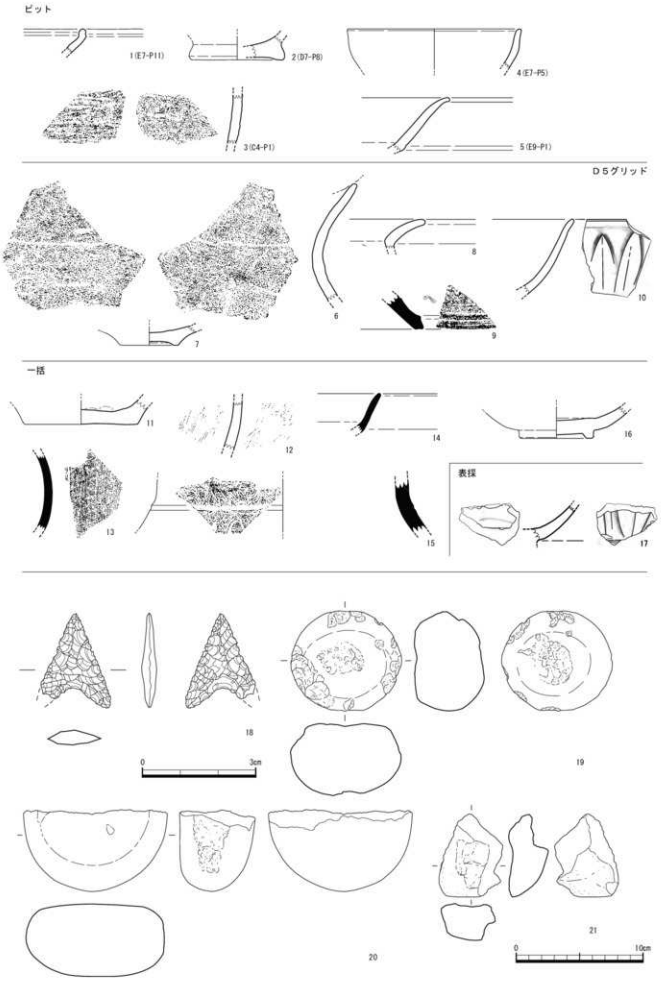
１～５はピット出土遺物である。１～３は縄文土器鉢である。３は外面に条痕、内面にはナデが施される。

６～ 10 はＤ５グリッド出土である。６は縄文土器深鉢の頸部で、波状口縁を呈するとみられ、外面・内面ともに条痕が施される。９は須恵器器台の底部である。一部に波状文がみられる。10 は青磁碗である。外面には片刃彫りの鎬蓮弁文が施される。

11 ～ 16 は調査区一括、17 は表面採集遺物である。13 は須恵器瓶類とみられる。外面にはカキ目が施される。15 は須恵器器台で、脚部に向かって、広がる部分にあたる。沈線を挟んで、上下に波状文が施される。16 は青磁碗である。

17 は青磁碗で、下部は高台に接する部分である。外面には片刃彫りの鎬蓮弁文が施される。

18 は４号土坑出土の黒曜石製の打製石鏃である。片方の基部が欠損している。19 は凹石である。敲打痕と磨り面が明瞭に残る。20 は磨り石、21 は石皿の破片とみられる。一部に使用痕が見られる。19 ～ 21 はいずれも安山岩製である。



第 24 図　その他の出土遺物実測図（1 ～ 17：1/3、18：1/1、19 ～ 21：1/3）

Ⅳ　尾部田遺跡の調査

（１）調査の方法と概要（第 25 図）

調査は朝日工区の南東側、朝日川左岸の沖積地を対象として、東西約 47 m、南北約５～７ｍの範囲において実施した。まず、機械による耕作土除去を行い、その後表土剥ぎを実施した。遺構検出面は黄褐色粘質土で、前年度に予備調査を実施したトレンチ付近では基盤土より約 30 ㎝の深さで確認されていた。表土剥ぎの結果、調査区全体が北側を流れる朝日川に向かって傾斜していることもあり、このような地形の傾斜は土層（第 26・27 図）でも確認することができる。

遺構は旧水田の畦畔を境とした、調査区の東側で溝状遺構が２条、土坑が３基、ピットが 10 数個検出されたが、西側においては、確認されなかった。

（２）遺構と遺物

１．溝状遺構

１号溝状遺構

（第 27･29 図　図版 11･16）

この溝状遺構は調査区の中央付近で確認された。東西方向を軸とし、確認された長さは約７ｍである。検出面からの深さは 10 ㎝以下と浅く、大きく削平を受けていると考えられる。

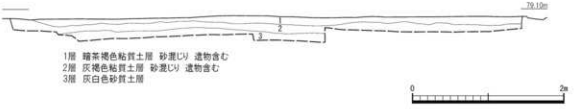
遺物は土師器椀、青磁碗、縄文土器鉢が出土している。

第 29 図１～５は土師器椀である。１は高台端部がやや内湾するのに対し、２はやや外につまみ出すように仕上げている。６は青磁碗である。内面には片刃彫りの櫛描文が施される。７は縄文土器鉢で、底面は平底である。

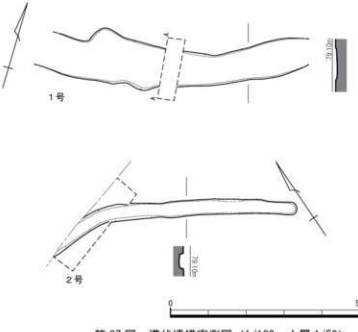
２号溝状遺構（第 27 図　図版 11）

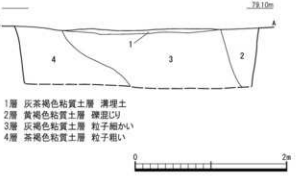
この溝状遺構は調査区の中央よりやや東寄りで確認された。南東方向から北

第 25 図　遺構配置図（1/500）



第 26 図　1 トレンチ西壁土層実測図（1/50）





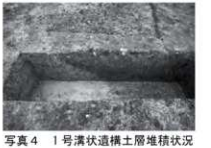
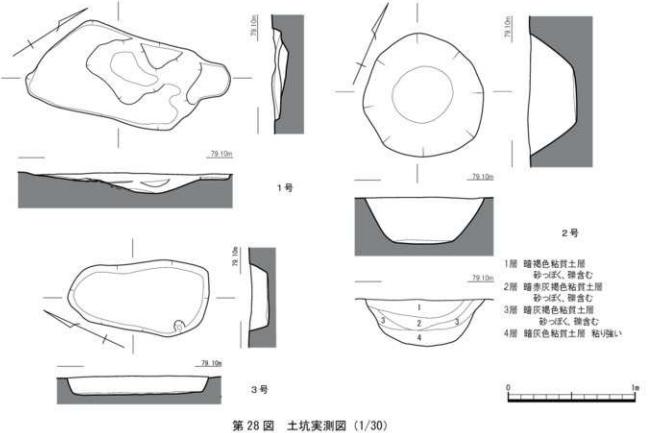


写真 4　1 号溝状遺構土層堆積状況

第 27 図　溝状遺構実測図（1/100、土層 1/50）



第 28 図　土坑実測図（1/30）

西方向にややカーブしており、北西側は調査区外へ延びる。確認された長さは約 6.1 m、検出面からの深さは約 10 ㎝で、断面形は逆台形を呈する。

遺物は縄文土器や土師器の小破片が出土したが、図示可能なものはなかった。

2．土坑

1号土坑（第 28･29 図　図版 12･16）

この土坑は 1 号溝状遺構の東側で確認された。平面形は不定形を呈する。床面は 3 段見られる、平坦な段と傾斜する段がある。壁は南側を除き、急角度で立ち上がる。規模は北東 - 南西軸が約 1.6 m、北西 - 南東軸が約 0.7 m、検出面からの深さは最も深い部分で約 15 ㎝を測る。

遺物は青磁碗が出土した。

第 29 図 8 は青磁碗である。内面には片刃彫りの櫛描文が施される。

2号土坑（第 28 図　図版 12･16）

この土坑は 1 号土坑の東側で確認された。平面形はほぼ円形である。床面はわずかに舟底状を呈し、壁は比較的緩やかに立ち上がる。規模は南北軸、東西軸約 1.0 m、検出面からの深さは約 35 ㎝を測る。また、埋土の堆積状況から、自然に埋没したものと推定できる。

遺物は土師器椀が出土した。

第 29 図 9 は土師器碗である。高台はあまり開かず、先端を丸く仕上げる。

3号土坑（第 28 図　図版 12）

この土坑は 1 号土坑の北西側で確認された。平面形は楕円形を呈し、床面は平底である。壁は急角度で立ち上がる。規模は北西 - 南東軸約 1.1 m、北東 - 南西軸約 0.5 m、検出面からの深さは約 10 ㎝を測る。

遺物は縄文土器や土師器の小破片が出土したが、図示可能なものはなかった。

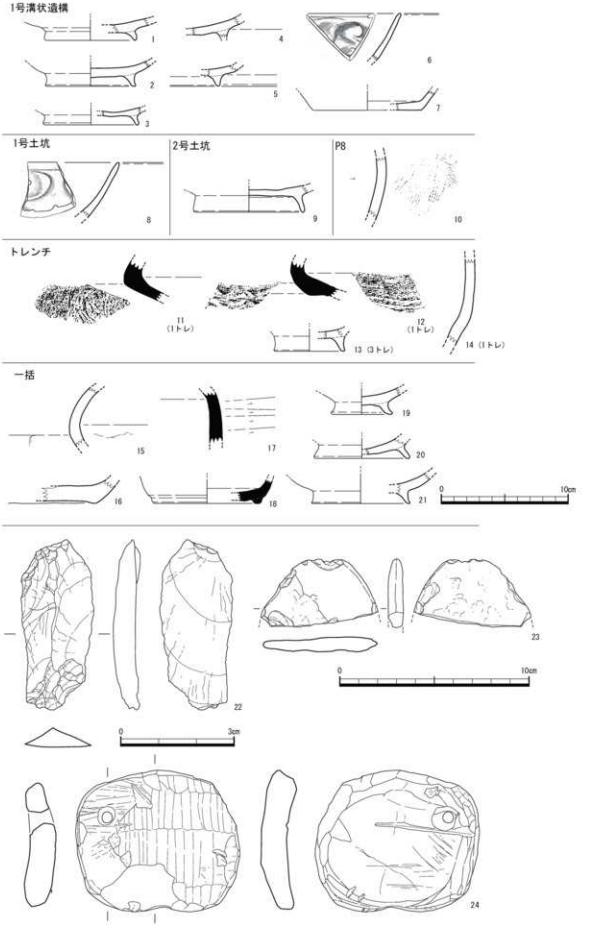
3．その他の遺物（第 29 図　図版 16･17）

ここでは、遺構に伴って出土していない遺物やトレンチ掘り下げ時、検出時に出土した遺物などについて述べる。

第 29 図 11・12・14 は 1 トレンチ、13 は 3 トレンチ出土である。11・12 は須恵器甕の頸部で内面には同心円タタキが見られる。14 は縄文土器の深鉢と思われるが、器面は磨耗のため、調整は不明である。13 が土師器椀である。高台端部を外につまみ出すように仕上げる。

15 ～ 21 は調査区の一括遺物である。15 は土師器の甕で外面には接合痕が残る。16 は縄文土器の鉢の底部でやや上げ底気味である。17 は須恵器壺、18 は須恵器高台付き坏である。18 の高台は立ち上がり部分に近い、外側に貼り付けられている。19 ～ 21 は土師器椀である。19･21 は高台端部を外につまみ出しており、19 は丸く、21 は角張って仕上げている。20 は底面が膨らんでおり、高台は大きく外に開く。

22 ～ 24 は一括出土の石器・石製品である。22 は黒曜石製の剥片で長さ 4.50 ㎝、幅 1.95 ㎝、厚さ 0.70 ㎝、重さ 4.95g である。23 は安山岩製の磨製石斧の破片で、残存長 3.60 ㎝、幅 6.15 ㎝、厚さ 0.80 ㎝、重さ 23.15g ある。24 は滑石製の温石で完形である。長さ 7.5 ㎝、幅 8.7 ㎝、厚さ 1.9 ㎝、重さ 183.0g 。形状はやや湾曲しており、内湾を面には細かい擦痕が、外面には鉄分が多く付着し、幅 3 ～ 4 mm の工具調整痕が明瞭に残っている。



第 29 図　出土遺物実測図（1 ～ 21：1/3、22：1/1、23・24：1/2）

Ⅴ　総括

前章までに平田遺跡と尾部田遺跡の調査成果について述べてきた。平田遺跡ではでは竪穴建物跡５軒、掘立柱建物跡５棟、溝状遺構１条、土坑４基のほか、ピットや柱穴が多数、尾部田遺跡では溝状遺構２条、土坑３基、ピットが10数個、確認された。最後に簡単ではあるが、これらの遺構の時期やその性格などについて述べて、まとめとしたい[11]。

（１）平田遺跡

まず、竪穴建物跡については、１～３号が出土遺物からその時期を比定できる。１号竪穴建物跡については、土師器甕（第８図３）や屋内土坑より出土した土師器高坏（第８図５～10）から古墳時代中期中頃（５世紀前半～中頃）に位置づけられる。２・３号竪穴建物跡については、切り合い関係にあるが、平面的には確認ができなかったため、遺物から３号→２号の２時期があると判断できた。前述したように遺物の取り上げが混乱したため、２軒の遺物が混在しているが、３号が弥生土器壺（第11図３）から弥生時代後期、２号が第11図１・２、４～８の土師器で古墳時代中期中頃～後半と考えられる。また、４号・５号については、時期を特定できるような遺物やカマドや炉跡、屋内土坑などの建物の時期をある程度示すような要素を確認できなかった。

次に掘立柱建物跡については、Ⅲでも述べたように規則性をもって配置されたと考えられることから、同時期のものと判断できる。その時期については、１号掘立柱建物跡の柱穴（Ｐ６）内より出土した須恵器高台付き坏（第17図５）や２号掘立柱建物跡の柱穴（Ｐ８）出土の須恵器蓋（第17図10）から、７～８世紀代と幅を持って捉えておきたい。

土坑については、１・２号土坑より出土した土師器椀から時期を特定できる。１号土坑出土の土師器椀（第23図１・２）は、体部の丸味、口縁端部が外反しない点、高台の高さなどから山本編年のⅧ期（９世紀後半～10世紀前半）に位置付けられる。２号土坑出土の土師器椀の底部（第23図４）も同様の時期か。４号土坑については、土師器甕から、古墳時代中～後期と比定できよう。

最後に溝状遺構については、遺物の出土量が極端に少なく、時期は分かるものは第21図１・２の縄文土器の鉢底部や須恵器器台であった。しかし、これらは溝状遺構そのものの掘削時期を示すものとは考えにくく、時期不明といわざるをえない。

古墳時代中期の集落については、その規模はひじょうに小さいものといえるが、古墳時代中期中頃～後半に平田遺跡一帯でも散発的ではあれ、集落が存在していたことが伺える。このような状況は、後期に入って集落が増加する以前の様相を示していると考えられ、盆地内で見られた一般的な集落の在り方であったと考えられる。

また、掘立柱建物群については前述のとおり、軸をそろえていることから、規則的に配置された同時期のものとして捉えることができる。内容的には居住域（２・３号）と倉庫（１号）といった、当時の宅地内での建物配置を考える上で興味深い資料になるといえる。さらにこの建物群のほかに同時期の遺構やその前後の遺構が確認されなかったことから、立地の面や時期的な面から限定的な土地利用を想定することもできる。

この建物群の性格については、盆地東部の求来里川流域における尾漕遺跡２・５次調査の事例から川に近接した場所での倉庫群、水運による物資の集積場所と指摘あるが[12]、平田遺跡の建物群についても二串川沿いに立地している状況から同様の性格のものとして捉えることができる。なお、官衙など公的な施設の存在をうかがわせるような遺物が出土していないことから、有力農民層の居宅であった可能性が考えられる[13]。

また、縄文時代後期後葉～晩期前半を中心とした縄文土器（第11図９・10、第24図１～３、６・７）なども出土しており、今回の調査区一帯もしくは二串川流域に当該期の集落などが存在していたことも想定できる。

（2）尾部田遺跡

まず、１号溝状遺構からは 10 世紀代の土師器椀（第 29 図１～５）や 12 世紀代の同安窯系の青磁碗が出土しており、少なくとも９～10 世紀代には掘られていたといえる。

また、土坑については１号土坑から同安窯系の青磁碗（第 29 図８）が出土したことから 12 世紀中頃～後半頃、２号土坑は土師器椀（第 29 図９）から 10 世紀代と考えられる。

また、トレンチ出土遺物や一括遺物の中には、今回の検出された遺構より古い時期（縄文時代～古墳時代）を示すものもある（第 29 図 11・12・14）。このことは調査区周辺、特に南側の台地裾に集落などが存在していたことを示すものと考えられる。

註

(1) 遺物の時期や実年代観については、次の文献を参考にした。
木村龍生「古墳時代須恵器の実年代観について」『先史学・考古学論究Ⅳ　龍田考古会　2003
重藤輝行「筑前・筑後の須恵器出現以後の土器」『山口県の古墳時代土器編年を考える』山口県考古学フォーラム 2008
重藤輝行「北部九州における古墳時代中期の土師器編年」『古文化談叢』第 63 集　九州古文化研究会　2010
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995

(2) 村上久和編『尾潜遺跡（第２次・第５次調査区）』大分県文化財調査報告書；第 112 輯　大分県教育委員会　2004

(3) 別府大学・田中教授のご教示による。

第２表　出土土器観察表（１）

遺構			年代	遺物		法量（ ）は復元値・推定値				調整		粘土							焼成	色調		備考
調査区番号	番号	検出年	出土位置	種別	器種	口径	脚部径	底径	器高	外面	内面	粒子大	小石	砂粒	長石	黒色粒	赤色粒	白色粒		内面	外面	
平田遺跡																						
第6区	1号		12	土師器	椀?	(9.8)		(6.8)	4.8	ナデ？不明瞭	ナデ？不明瞭	●	●			●	●	●	良	橙色	橙色	内面にススが付着
第6区	1号	P5	12	須恵器	杯身				(2.4)	回転ヘラケズリ、表面磨耗のため不明瞭	回転ナデ		●						良	灰白色	灰白色	
第6区	1号		12	土師器	椀	(16.4)			(6.7)	表面磨耗のため調整不明瞭	表面磨耗のため調整不明瞭・ナデ？	●	●			●			良	白色・黄橙色	橙色	内外土坑（10号土坑）出土
第6区	1号		12	土師器	鍋				(11.1)	一部ハケ目残存（不明瞭）	表面磨耗のため調整不明瞭	●	●			●			良	灰黄褐色	白色・黄橙色	内外土坑（10号土坑）出土
第6区	1号		12	土師器	椀?	(8.8)			(2.5)	ヨコナデ？ナデ	ナデ？ケズリ	●	●			●			良	白色・黄橙色	白色・黄橙色	内外土坑（10号土坑）出土 内面に煤付のため、調整不明瞭
第6区	1号		12	土師器	椀?	(12.0)			(4.1)	表面磨耗のため調整不明瞭	表面磨耗のため調整不明瞭	●	●			●	●		良	白色・黄橙色	白色・黄橙色	
第6区	1号		12	土師器	椀?				(3.3)	表面磨耗のため調整不明	表面磨耗のため調整不明		●		●		●		良	明赤褐色	明赤褐色	内外土坑（10号土坑）出土
第6区	1号		12	土師器	椀?				(4.4)	表面磨耗のため調整不明瞭	表面磨耗のため調整不明瞭	●	●			●	●		良	白色・黄橙色	白色・黄橙色	
第6区	1号		12	土師器	椀?				(3.7)	ハケ目・ナデ	工具痕・ナデ	●	●			●			良	橙色	橙色	内外土坑出土 一部赤味
第6区	1号	P5	12	土師器	椀?				(6.4)	表面磨耗のため調整不明	表面磨耗のため調整不明		●			●			良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第12区	1号		12	土師器	椀	(14.4)			(3.3)	ヨコナデ・ヘラケズリ？	ヨコナデ・工具ナデ	●	●			●	●		良	白色・黄橙色	白色・黄橙色	
第12区	2号		12	土師器	椀	(16.2)			(6.8)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	●	●			●	●		良	白色・橙色	白色・橙色	
第12区	2号		12	弥生	壺				(10.4)	ハケ目・ヨコナデ・タタキ	ハケ目	●	●				●		良	褐灰色	白色・黄橙色	頸部に沒線、櫛状痕
第13区	1号		12	土師器	椀				(3.8)	ヨコナデ	ヨコナデ指ナデ	●	●						良	白色・橙色	白色・橙色	
第13区	1号	P3	12	土師器	椀				(3.8)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ		●			●	●		良	白色・黄橙色	白色・黄橙色	
第13区	1号		12	土師器	椀				(3.4)	ヨコナデ・ナデ？	ヨコナデ・ヘラケズリ	●	●						良	淡黄褐色	白色・橙色	
第13区	1号		12	土師器	高杯				(3.1)	ハケ目後ナデ（くびれ）	ハケ目後ナデ	●	●				●		良	白色・黄橙色	白色・黄橙色	
第13区	1号	P1	12	土師器	高杯				(3.1)	ハケ目・ヨコナデ・指ナデ	ハケ目後ナデ	●	●						良	白色・黄橙色	白色・黄橙色	
第13区	1号		12	縄文	鉢				(4.2)	縄文・沈線・刺突文	ナデ	●	●				●		良	白色・黄橙色	白色・黄橙色	外面にススが付着
第13区	1号		14	縄文	鉢				(4.9)	ナデ・刺突文・沈線	条痕	●	●				●		良	白色・黄橙色	黄橙色	
第13区	1号		14	須恵器	杯身				(3.7)	回転ヘラケズリ	回転ナデ			●			●		良	灰色	灰色	
第13区	1号		14	縄文	浅鉢				(2.2)	調整不明	調整不明	●	●				●		良	灰黄褐色	灰黄褐色	
第17区	1号	P7	14	土師器	椀				(3.4)	ヨコナデ？・立体に磨耗のため調整不明瞭	立体に磨耗のため調整不明瞭					●			良	淡黄褐	白色・橙色	
第17区	1号	P6	14	土師器	椀	(12.5)			5.5	表面磨耗のため調整不明	表面磨耗のため調整不明	●				●	●	●	良	橙色	橙色	
第17区	1号	P7	14	土師器	椀				(2.2)	ヨコナデ	ヨコナデ		●						良	黄褐色	白色・黄橙色	
第17区	1号	P6	14	土師器	椀				(2.2)	表面磨耗のため調整不明	表面磨耗のため調整不明	●				●			良	橙色	橙色	
第17区	1号	P6	14	須恵器	椀	(13.4)			3.9	回転ナデ・回転ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ						●	●	良	灰	灰	底部刻線痕
第17区	1号	P7	14	須恵器	椀	(8.4)			(6.1)	回転ナデ・ヨキリ	回転ナデ・ナデ						●	●	良	灰色	灰色	口縁焼成

第３表　出土土器観察表（２）

遺構				出土位置	器種	法量（ ）は復元値・残存値					調整		色調								焼成	胎土	備考
遺構名	番号	層位	出土位置	層番号	種別	口径	脚部径	底径	器高	外面	内面	脚部内面	口縁	体部	脚部	内面	外面	脚部	内面	外面			
第17SC1	1層	PT	13	第他層	鉢				(15.1)		ミガキ	刷毛ナデ					●	●			良	良色	良色	
第17SB9	1層	PL	14	第他層	壺					(6.1)	タタキ後ミガキ	同心円状・放ち高台			●						良	灰白色	灰白色	縁土不確定
第17SB9	3層	PL1	14	土師器	壺					(2.7)	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケメ	●	●							良	浅黄橙色	浅黄橙色	
第17SB10	2層	PR	14	第他層	杯蓋					(2.1)	回転ナデ（表面摩耗のため調整不明瞭）	回転ナデ（表面摩耗のため調整不明瞭）					●	●			良	灰白色	灰色	
第18SB1	2ミゾ		14	縄文	鉢			5.2	(2.3)	ケズリ後ナデ・指オサエ後ヨコナデ・ナデ	ナデ		●	●			●				良	灰白色	灰白色	外面に黒斑あり
第18SB1	3ミゾ		14	第他層	器台				(4.7)	回転ナデ・透かし	回転ナデ						●				良	灰白色	灰白色	
第23SB1	1土		14	土師器	杯	(15.7)		5.7	5.5	回転ナデ回転ハケメ下段水調整	回転ナデ・ナデ		●	●		●					良	明灰色	灰白・橙色	
第23SB2	1土		14	土師器	杯	(13.2)		6.8	5.9	回転ナデ・回転ハケメ下段水調整	回転ナデ・ナデ		●	●		●					良	灰黄褐色	灰白・橙色	
第23SB2	2土		14	土師器	壺					(8.3)	ヨコナデ後ナデ・ハケ目	ヨコナデ後ナデ（ハケ目）	●	●	●						良	灰白・赤褐色	橙褐色	縁台脚
第23SB4	1土		15	土師器	杯			6.7	(1.9)	表面摩耗ため調整不明瞭	表面摩耗ため調整不明瞭		●								良	黒褐色	灰白・黒褐色	
第23SB5	9土		15	土師器	壺	(16.2)				(8.4)	ヨコナデ・ケズリ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ	●	●			●				良	明灰色	灰白・赤褐色	一部合成埦土、外面に接合痕
第23SB6	4土		15	土師器	壺					(18.7)	ハケ目後ナデ	ヘラケズリ	●	●			●				良	灰褐色	灰白・橙色	縁土不明瞭
第24SE1	ST	PL1	15	縄文	鉢					(2.4)	調整不明	調整不明	●	●		●					良	灰黄褐色	灰黄褐色	縁土不明瞭
第24SE3	ST	PR	15	縄文	鉢			(7.2)	(2.9)	ナデ	ナデ		●	●			●				良	灰白・橙色	明赤褐色	
第24SE3	C4	PL	15	縄文	鉢					(6.6)	条痕	ナデ	●	●							良	灰白・黄橙色	灰白・黄橙色	縁土不明
第24SE4	ST	PR	15	土師器	鉢	(12.6)				(2.2)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	●	●			●	●			良	灰白・黄橙色	灰白・黄橙色	
第24SE3	D9	PL	15	土師器	高杯					(6.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	●	●			●				良	灰白・黄橙色	灰黄褐色	内面にスス付着
第24SE6	D6		15	縄文	鉢					(9.4)	条痕	条痕	●	●			●	●			良	明灰色	橙色	調整不明瞭
第24SE7	D6		15	縄文	鉢			4.6	(1.1)	ナデ	ナデ		●	●				●			良	灰黄色	灰白・黄橙色	
第24SE9	D6		15	土師器	壺					(2.2)	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	●	●			●				良	浅黄橙色	灰白・黄橙色	
第24SE9	D6		15	第他層	器台					(2.7)	回転ナデ	回転ナデ					●	●			良	灰白色	灰白色	脚欠文
第24SE10	D6		15	弥生	鉢					(6.1)	福岡貝文（六段貝ヵ）	条痕											
第24SE11	~SE		15	縄文	鉢			(8.8)	(2.4)	ナデ	ナデ・指オサエ		●	●							良	灰白・黄橙色	灰白・黄橙色	
第24SE12	~SE		15	土師器	壺					(6.4)	ハケ目	ハケ目	●	●							良	灰白・橙色	褐灰色	縁土不明
第24SE13	~SE		15	第他層	鉢					(6.4)	ミガキ	回転ナデ			●						良	灰色	灰色	
第24SE14	~SE		15	第他層	杯					(2.1)	回転ナデ	回転ナデ					●				良	灰色	灰色	
第24SE15	~SE		15	第他層	器台					(4.1)	回転ナデ	回転ナデ						●			良	灰色	灰色	脚欠文、注脚
第24SE26	~SE		15	弥生	鉢			5.6	(2.5)	磨耗													
第24SE27	表層		16	弥生	鉢				(2.3)	鉢脚・福岡貝文（六段貝ヵ）	鉢脚												
黒田田遺跡																							
第26SC1	2層		16	土師器	鉢				(2.6)	(2.7)	ヨコナデ	ナデ	●								良	黒褐色	黒褐色	一部合成埦土
第26SE2	2層		16	土師器	鉢					(7.2)	ヨコナデ・回転ハケ目ケズリ後ナデ	ナデ	●	●							良	明灰色	灰白・黄橙色	一部合成埦土
第26SE3	1層		16	土師器	鉢				(7.4)	(3.4)	表面摩耗ため調整不明	表面摩耗ため調整不明				●					良	橙色	橙色	一部合成
第26SE4	1層		16	土師器	鉢					(3.4)	ナデ	ナデ	●	●							良	黒褐色	灰白・黄橙色	一部合成埦土
第26SE5	1層		16	土師器	鉢					(3.4)	表面摩耗ため調整不明	表面摩耗ため調整不明	●	●		●					良	灰白・黄橙色	黄灰色	
第26SE6	1層		16	弥生	鉢					(3.8)	鉢脚	鉢脚・鉢脚文											口径欠ヵ、鉢脚
第26SE7	1層		16	土師器	杯					(8.4)	(1.4)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	●		●					良	灰白・橙色	灰白・黄橙色	口径欠ヵ、鉢脚
第26SE8	1層		16	弥生	鉢					(4.4)	鉢脚	鉢脚											口径欠ヵ、鉢脚
第26SE9	2土		16	土師器	鉢					(8.4)	(2.1)	表面摩耗ため調整不明瞭	表面摩耗ため調整不明瞭	●			●				良	明灰色	灰白・黄橙色	一部合成埦土
第26SE10	PR		16	土師器	皿ヵ					(3.1)	ハケ目	ケズリ後ナデ	●	●							良	褐色	灰白・黄橙色	縁土不明
第26SE11	ストレート		16	第他層	壺					(3.1)	回転ナデ	回転ナデ・同心円状当具痕					●				良	灰色	灰色	
第26SE12	ストレート		16	第他層	壺					(3.4)	回転ナデ・タタキ	回転ナデ・同心円状当具痕					●	●	●		良	灰色	灰色	
第26SE13	ストレート	1層	17	土師器	鉢					(5.4)	(1.7)	ヨコナデ・ナデ	ナデ	●	●						良	灰白・黄橙色	灰白・黄橙色	台脚に調整不明瞭
第26SE14	ストレート		17	縄文	鉢脚					(6.4)	ナデ	表面摩耗ため調整不明	●	●			●				良	灰白色	黒褐色	
第26SE15	~SE		17	土師器	壺					(4.9)	表面摩耗ため調整不明瞭・組合痕	表面摩耗ため調整不明瞭・工具ナデ	●	●		●					良	灰白・橙色	灰白・黄橙色	縁土不明瞭
第26SE16	~SE		17	縄文	鉢					(2.4)	表面摩耗ため調整不明	表面摩耗ため調整不明	●	●							良	暗灰黄色	橙色	
第26SE17	~SE		17	第他層	器					(6.4)	回転ハケメ	回転ナデ					●				良	灰色	暗灰色	縁土不明瞭
第26SE18	~SE		17	第他層	杯					(8.4)	(1.9)	回転ナデ・ハケ目後ナデ	回転ナデ				●				良	灰色	灰色	
第26SE19	~SE		17	土師器	鉢					(4.8)	(2.3)	表面摩耗ため調整不明	ナデ	●	●			●			良	浅黄色	浅黄色	
第26SE20	~SE		17	土師器	鉢					(7.4)	(1.4)	ヨコナデ・ナデ	表面摩耗ため調整不明瞭	●	●						良	黒褐色	黒褐色	
第26SE21	~SE		17	土師器	鉢					(2.4)	(2.4)	表面摩耗ため調整不明	表面摩耗ため調整不明	●	●			●			良	暗灰色	橙色	一部合成埦土

平田遺跡調査区全体写真（南から）

写真図版２

１号竪穴建物跡発掘状況（南西から）

１号竪穴建物跡屋内土坑土層堆積状況

１号竪穴建物跡屋内土坑発掘状況（南東から）

１号竪穴建物跡カマド発掘状況（西から）

１号竪穴建物跡遺物出土状況

２・３号竪穴建物跡発掘状況（南西から）

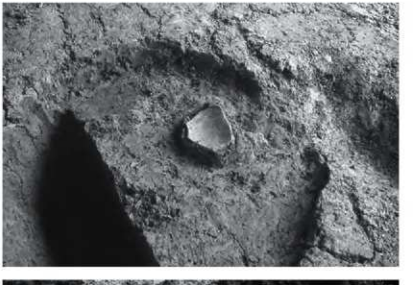
写真図版４

２号竪穴建物跡カマド発掘状況（北西から）

４号竪穴建物跡発掘状況（南東から）

５号竪穴建物跡発掘状況（北東から）

１号掘立柱建物跡発掘状況（北東から）



１号掘立柱建物跡柱穴（P6）遺物出土状況

２号掘立柱建物跡発掘状況（南東から）

写真図版６

２号掘立柱建物跡柱穴（P5）
柱木出土状況

２号掘立柱建物跡柱穴（P5）
柱木出土状況

２号掘立柱建物跡柱穴（P7）柱木出土状況

２号掘立柱建物跡柱穴（P10）柱木出土状況

2号掘立柱建物跡柱穴（P13）柱木出土状況

2号掘立柱建物跡柱穴（P13）柱木出土状況

2号掘立柱建物跡柱穴（P14）柱木出土状況

2号掘立柱建物跡柱穴（P14）柱木出土状況

２号掘立柱建物跡柱穴（P11）発掘状況

３号掘立柱建物跡発掘状況（北西から）

４号掘立柱建物跡発掘状況（南東から）

５号掘立柱建物跡発掘状況（東から）

溝状遺構検出状況（南から）

1号土坑発掘状況（南から）

2号土坑発掘状況（南から）

3号土坑発掘状況（南東から）

4号土坑発掘状況（南東から）

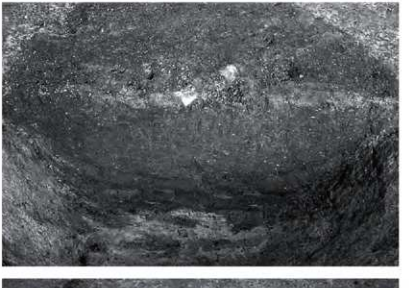
尾部田遺跡調査区全景（南東から）

１号溝状遺構発掘状況（東から）

２号溝状遺構発掘状況（南東から）

1号土坑完掘状況（南西から）

3号土坑完掘状況（南から）



2号土坑土層堆積状況

2号土坑発掘状況（北東から）

8-1

8-2

8-3

8-4

8-7

8-5

8-6

8-9

8-8

8-10

11-1

11-5

11-2

11-4

11-7

11-6

11-3

11-8

11-9

写真図版 14

11-10

12-1

12-2

17-1

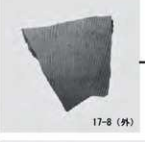
17-2

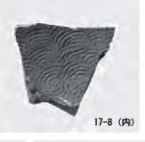
17-3

17-4

17-5

17-6


17-8（外）


17-8（内）

17-9

17-7

17-10

23-1

23-2

21-1

23-1（底）

23-2（底）

21-2

23-3

23-4

24-4

24-5

24-8

24-11

24-14

23-5

24-3

24-6

24-9

24-12

24-15

23-6

24-1

24-2

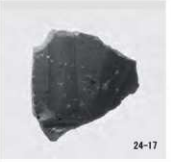
24-7

24-10

24-13

24-16

写真図版 16


24-17

24-18

24-18

24-21

24-19

24-20

尾部田遺跡

29-1

29-2

29-3

29-4

29-5

29-6

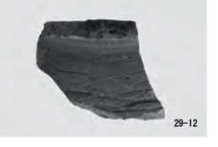
29-7

29-8

29-9

29-10

29-11


29-12

29-13

29-14

29-15

29-16

29-17

29-18

29-19

29-20

29-21

29-22

29-23

29-24

29-24（内）

29-24（外）

報　告　書　抄　録

ふりがな	あさひのいせき１　ひらたいせき・おべたいせき２じのちょうさ
書名	朝日の遺跡Ⅰ　平田遺跡・尾部田遺跡２次の調査
副書名	県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	（1）
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第108集
編著者名	若杉竜太・上原翔平
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077　日田市南友田町516-1　　0973(24)7171
発行年月日	2013年3月21日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平田遺跡（ひらたいせき）	大分県日田市（おおいたけんひたし）大字小迫（ちいさこ）	44204-6	204380	33°20′37″	130°54′41″	20111003～1124	2,749㎡	圃場整備
尾部田遺跡（おべたいせき）	大分県日田市（おおいたけんひたし）大字小迫（ちいさこ）	44204-6	204035	33°20′24″	130°54′47″	20111019～1116	1,055㎡	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平田遺跡	集落	弥生 古墳 奈良	竪穴建物跡５軒 掘立柱建物跡５棟 溝状遺構１条 土坑４基	縄文土器 土師器・須恵器 青磁 打製石鏃 凹石・磨石・石皿	掘立柱建物群は軸方向を揃えて配置されており、当該期の宅地内での建物構成を考える上で重要な資料といえる。
尾部田遺跡	集落	古代	溝状遺構２条 土坑３基	縄文土器 土師器・須恵器 青磁 剥片・打製石斧 温石	各時代にわたる遺物が確認されており、調査地の南側一帯では継続的に集落が営まれていたと想定される。また、市内では２例目の温石が出土した。

要　約

平田遺跡は二串川右岸の沖積地に位置し、調査地付近の標高は約８０ｍである。

調査では弥生時代後期や古墳時代中期の竪穴建物跡が確認されたが、どちからも２軒前後と集落規模としては小さいといえる。特に古墳時代中期の建物跡はカマド導入期のものとみられ、盆地内における同時期の他の集落規模と同様の状況をうかがうことができる。また、７～８世紀代の軸方向を揃えた５棟の掘立柱建物跡が確認された。これらの建物群は居住域や倉庫から構成されていたとみられ、当時の宅地内での建物配置や構成を考える上で興味深い資料といえる。この他、市内では出土例の少ない１０世紀代の遺物が出土している。

尾部田遺跡は朝日川左岸の沖積地に位置し、調査地付近の標高は約７９ｍである。

調査では古代の溝状遺構や土坑が確認されたほか、縄文土器や土師器・須恵器、青磁など各時代にわたる、流れ込みとみられる遺物が出土した。このことから調査地の南側一帯の継続的に集落が営まれていたと想定される。また、市内では２例目となる滑石製の温石が出土した。

朝日の遺跡Ⅰ

平田遺跡・尾部田遺跡２次の調査

2013年3月21日

編　集　日田市教育庁文化財保護課
〒877-0077　大分県日田市南友田町516-1
発　行　日田市教育委員会
〒877-0023　大分県日田市田島2-6-1
印　刷　山本印刷有限会社
〒877-0059　大分県日田市大日町3986-3

日田市

PRINTED WITH SOY INK